

聖書：I コリント 15：35～49

説教題：天上のかたち

日時：2016年3月27日（朝拝）

今日の御言葉は、ある人の次のような問いから始まります。「死者は、どのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか。」これは真理を求める探究心から発された問いではなかったようです。この手紙が宛てられたコリントの教会の中には「死者の復活はない」と主張する人たちがいました（12節）。彼らは単純に復活は考えにくいという考えを持っていたのではありません。この教会には、この手紙の他の部分から分かりますように、特別な御霊の賜物を受けていた人たちがいました。特に異言を話す人たちがいました。そのような聖霊の独特な現れはキリスト教の宣教の初期の時代には多く見られたようです。そういう状況で、自分たちは今や御霊によって救いの最終状態に達したと考える人たちがいました。そしてそれと組み合わされていたのが肉体に対する軽蔑でした。このからだはやがて死ぬ時に脱ぎ捨てるだけのどうしようもない部分である。救いには関係がない、より下等な部分であると。その人々は自分たちは霊的な人間であり、救われていると主張すると同時に、肉体については無頓着な歩み、不道德な歩みをしていました。その彼らに対して、パウロは復活のからだについてのメッセージを語って行くのです。

このからだの復活についてのメッセージはキリスト教の特徴と言えます。世の多くの宗教は魂の救いは主張しても、からだの救いは主張しません。肉体をどこかで軽視し、靈魂不滅ばかりを一生懸命説くのです。しかし聖書によれば、神は私たちが魂とからだの両方を持つ存在として造られました。その両方があって初めて神を映し出す人間であると語っています。ですからその人間の救いは魂ばかりでなく、からだにも及ぶものでなくてはならないのです。

まずパウロが取り上げているのは麦やその他の穀物の種粒です。農夫はそれを地に蒔きます。するとその種は土の中に埋められ、死んで解体しますが、そこから思わぬ結果が現れて来ます。みずみずしい若芽が芽を出し、花を咲かせ、やがて実を結びます。パウロが指摘しているのは、「蒔いた種」と「後にできるからだ」の想

像を超えた変わり様です。あの干からびた種から青々とした植物が出て来るとは誰が予想し得たでしょうか。そのように導いたのは神です。とするなら、どうして私たちの死後、神が新しいからだを与えてよみがえらせて下さることができないなどと私たちが決め付けることなどできるでしょう。

また神のみわざはバラエティーに富んでいます。39節：「すべての肉が同じではなく、人間の肉もあり、獣の肉もあり、鳥の肉もあり、魚の肉もあります。」 私たちはすでに色々な動物に接したり、テレビで見たりしているため、何も感じなくなっているかもしれませんが、もし地をはう動物しか見たことがない人が空高く羽ばたく鳥を見たらどうでしょう。その人は大いに驚き、どうして肉体を持つ動物があんな風に空を飛べるだろうかとビックリ仰天することでしょう。あるいは水中を泳ぐ魚を初めて見た人もそうでしょう。あれだけ長く水の中に潜り、スイスイ自由自在に泳げる生き物がいるとは！と驚嘆するに違いありません。私たちがテレビ番組等で世界各地の珍しい生き物を見る時に、ハ～何という生き物が地球上には存在することか！と思わず感嘆の声をあげてしまうことがあります。神はそのように私たちにとってにはわかには信じられないような多種多様な生き物を現実には造っておられます。

さらに天上のからだもあると40節にあります。パウロはここで宇宙における神のみわざに注目させています。そこには「太陽の栄光もあり、月の栄光もあり、星の栄光もあり、個々の星によって栄光が違います。」 そこにも多種多様な栄光が見られます。神は無限の創造力を持っておられることの一端が示されています。とするなら、どうして私たちは自分の小さな頭でだけ考えて、復活なんかあり得ないと結論すべきでしょうか。神は私たちの想像をはるかに超える御力を持って、私たちに復活のからだを備えることができるのです。

こう述べてパウロは復活のからだはどのようなものであるかをより具体的に語って行きます。42～44節：「死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらせられ、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらせられ、弱いもので蒔かれ、強いものによみがえらせられ、血肉のからだで蒔かれ、御

霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。」ここでパウロは今のからだとやがての復活のからだを4つの言葉で対比して語っています。まず一つ目、今のからだは「朽ちるもの」と言われています。確かに私たちのからだは生まれた瞬間から死に向かって進み始めます。青年期にはぐんぐん成長して命の躍動感が感じられても、実は腐敗のプロセスが進行しています。私たちのからだにはあつという間に老化現象が現れ、壊れる方向に進みます。ところが復活の体は朽ちないものです。どんなに時間が経っても古くなったり、壊れたり、衰えたりしない。全く老化しない！何と素晴らしいからだでしょうか！2つ目に今のからだは「卑しいもの」と言われています。もちろんこのからだは神が下さったものであり、それ自身卑しいものではありませんが、罪の結果、大いに本来の輝きを失ってしまいました。それはやがて頂く栄光のからだに比べるなら、はるかに劣るもの、多くの点でみすばらしいものと言わざるを得ないのです。3つ目に今の私たちの体は「弱いもの」です。私たちはすぐ疲れてしまいます。休息を必要とし、睡眠を必要とし、食べ物を必要とします。しかし復活の体は「強いからだ」です。やがての天国には夜がありません。私たちは睡眠を取らなくても大丈夫なからだを頂くのです。あるいは食べ物を必要としないとも言われています。食べ物を取り入れてエネルギーを補給し続けなくては保てない弱いからだではない。やがての天国では疲労感を少しも覚えることなく、神の栄光のために喜びをもって仕え続けることのできる体を頂くのです。そして四つ目に今のからだは「血肉のからだ」と言われている一方、復活のからだは「御霊に属するからだ」と言われています。コリント教会のある人々は、先に見たように、御霊の祝福を受けている自分たちは、やがて肉体を脱ぎ捨て、肉体とは関係のない状態に入ると考えていました。そういう彼らにとって「御霊のからだ」という言葉は矛盾する言葉です。しかしパウロによれば「御霊」と「からだ」は切り離せないのです。この「御霊のからだ」とは御霊に支配された体のことです。聖霊の祝福は旧約時代から、やがての祝福として約束されて来ましたが、まさに天国で私たちが頂くからだは御霊の祝福で満ち満ちたからだなのです。聖霊の宮として完全に聖化されたからだなのです。

どのようにして私たちはこの御霊のからだを頂くことができるのでしょうか。そ

の根拠が 45 節以降に語られています。ここに人類の歴史を理解するための聖書のカギである最初の人間アダムと最後のアダムに関するメッセージがあります。まず 45 節に「最初の人アダムは生きた者となった」とあります。これは創世記 2 章 7 節の「神である主は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」という御言葉を指しています。アダムはこの状態で神に従う生活を通して、最終状態に達するようにという歩みの中に置かれました。しかしアダムは罪を犯して墮落し、その道から外れてしまい、本来たどり着くべきゴールにたどり着けない者となってしまいました。彼は全人類の代表という公的な立場にありましたから、彼が道を踏み外した結果、その後続く全人類も、彼と同じ状態にある者となってしまいました。

しかし神は私たちに新しい始まりを与えてくださいました。それはイエス・キリストによる始まりです。イエス・キリストは人としての完全な生涯を最後まで歩み通されました。そして最初のアダムが到達すべきだった最終状態に達しました。聖書はこのイエス・キリストを第二の人と述べています。すなわち第一の人であるアダムと同じように、神が人類の代表として立てたもう一人の人であると。と同時に「最後のアダム」とも言われています。これはもはや第 3 や第 4 のアダムは不要とする、神が備えた決定的な人類のかしらであるということです。この方が 45 節で「生かす御霊となりました」とあります。この方はその地上の生涯を通して、他の多くの者に御霊の祝福を与えることのできる方とられたのです。この道から落ちてしまった人々に御霊の祝福を分け与えるために、キリストはどれほどの犠牲を払われたことでしょうか。イエス様の十字架はまさに人々をこの祝福に生かすためのとてつもない代償でした。しかしその歩みを経て、今やキリストはご自分が望む多くの人々に御霊の祝福を与えることのできる方とられた。キリストに連なる者は誰でもこの祝福を受けることができます。こうしてキリストと結ばれた者たちは「天に属する者」となることが 47～48 節に示されています（新共同訳参照）。それゆえその者たちは 49 節にあるように「天上のかたち」を持つのです。地上にある今のからだからは想像もできないような、やがて天で生活する者にふさわしい「天上のかたち」を持つことになるのです。

聖書にはやがてのからだについては少しのヒントしかありませんが、私たちが覚えるべきは、この日、復活されたイエス様は栄光の状態へ入られたということです。福音書に記されている地上の生活と同じ状態に戻って来られたのではありません。ですから復活後のイエス様は、それまでとは違う印象を弟子たちに与えられました。しかしその時はまだ天に昇っておられない状態でした。しかしキリストが天に昇られた後、この方に会った人がいます。それはパウロです。ダマスコ途上で彼は栄光の主に会います。その主は太陽よりも明るく輝く光の内におられたと使徒の働きは述べています。パウロはその方を見ました。そして私たちもやがてこの方のありのままの栄光の姿を見ると言われています。Iヨハネ3章2節：「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」私たちはその日、御霊のからだを持つ栄光の主を見ます。しかし素晴らしいことは、その時、私たちはそのキリストに似た者となっている自分自身を発見するということです。栄光のキリストを見て私たちは心からうっとりするでしょうけれども、何と自分自身がその方を映し出すような姿になっている。ピリピ書3章21節：「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えて下さるのです。」これはイエス様がこの日の復活によって、私たちのために勝ち取ってくださった祝福です。このキリストを信じ、キリストにより頼む者は誰でも、この祝福に生かしていただくことができます。その人は復活の日に朽ちることがなく、卑しさがなく、弱いところが少しもないからだをやがて頂くのです。御霊のからだ、天上のかたちと言われるからだをいただいて、もはや死もなく、悲しみ、苦しみ、叫び、涙もない、それらのものが過ぎ去った天の御国における生活を導かれることになるのです。